

『福山大学経済学論集』
第46巻
(2022年3月) 抜刷

大学生に対するスポーツマネジメントに関する授業の概観とその効果
—受講生提出レポートの定性分析より—

中 村 和 裕
吉 田 卓 史

大学生に対するスポーツマネジメントに関する授業の概観とその効果

―受講生提出レポートの定性分析より―

中村 和裕¹

吉田 卓史²

概要

近年、スポーツの成長産業化が国策に位置付けられる中で、それを担うスポーツ経営人材育成について高等教育機関としてのスポーツマネジメント教育のあり方が問われている。本学では、2007年から経済学部経済学科の2年次から選択出来るスポーツマネジメントコースが新設された。本研究では本学スポーツマネジメントコースが提供する科目「スポーツマネジメント論」に着目し、その授業の実際と授業満足度等を測る定性的な調査を実施した。その結果として、ディスカッションやコミュニケーションスキルの獲得、プレゼンテーション能力の向上など一定の成果が示唆された。今後の展開と課題については本授業で学んだ学生がその知識と経験を活かしリアルな現場でマネジメント能力を発揮できるようことである。さらに講義内で立案した企画を実際に実施できるよう学生と地域をつなぐ仕組みを作ることが必要と考える。

キーワード

スポーツマネジメント教育,授業フレーム構築,頻出語,共起ネットワーク

1, はじめに

2013年6月14日に閣議決定した第2次安倍内閣による成長戦略である日本再興戦略の改訂2016版では、スポーツの成長産業化が明記され、スポーツに関連される市場拡大が我が国の国策として位置づけられた(内閣府2016)。スポーツの成長産業化を推進する上で既存市場の発展と新規市場の開拓を担えるスポーツ経営人材が必要不可欠である。この我が国のスポーツ経営人材育成に関して、早稲田大学スポーツナレッジ研究会(2013)が発行した「スポーツマネジメント教育の課題と展望」は、国内外での事例を元にその在り方を示唆した根本的な一次資料といえる。その冒頭では、近年スポーツマネジメントあるいはスポ

¹ 福山大学経済学部経済学科講師 : kaznaka@fukuyama-u.ac.jp

² 福山大学経済学部経済学科准教授 : yoshida@fukuyama-u.ac.jp

ーツビジネスの教育は、多くの大学に関連する学部、学科、コースが設置され、その結果としてスポーツマネジメントを学んで卒業、修了する学生も増えつつある。しかしこのような現象に対して就職先の増加が伴っておらず、スポーツに関する人材の需要は潜在的に供給過多であるが、現在のスポーツ組織の運営に関わる人々に、マネジメントやビジネスの知見が決定的に不足しているのも事実であるとの見解を示している^{注1)}。

これらのことから大学の中で運動部活系の指定強化部を有しながら経済・経営系の学部しかない大学や教育学部系の大学の中にも、スポーツマネジメントやスポーツビジネスなどに関連する学部、学科、コースの設置や鞍替えがブームの様相を呈したが、職としての社会的需要は他産業と比較しても限定的である。また潜在的な新規市場とも言える県市町レベルでの各競技団体の運営者は基本的には兼業で、既存事業の継続が主な事業であり、新たなサービスを事業化させる専門知識を有した専属雇用が可能になる仕組みが必要と考えられる。なぜなら新たなサービスを事業化させることは、顕在化していないスポーツ実施群の掘り起こしと参画の機会となり、その結果として大上段的な見解ではあるが、幼少期から青年期での運動習慣享受による、生き活きとした社会の担い手を育成すると共に、健康寿命の増進などによる医療費や介護費等の抑制につながるものと考えからである。

上記のような現状の中で、高等教育機関としてスポーツマネジメント教育を実施する筆者らは如何なる教育成果を設定し、それに伴う教材はどのような内容であるかについて議論を重ねており、またこの問題意識こそ本研究の根幹をなす動機である。本学^{注2)}がある広島県福山市は、1916年の市制施行後、とりわけ戦後、人口規模と市域面積を急激に拡大させており、2021年11月現在では約46万人の人口を擁する全国有数の地方中核都市である。事業所数・従業員数は2016年に至っても大幅な減少をみせる全国と対照的に2万事業所、20万人雇用を維持している（張 2020）。福山市の社会経済構造としてJFEスチール株式会社（西日本製鉄所/福山地区）の企業城下町では説明できない、伝統工芸品を補助する形で成長した自主独立のものづくり企業の多さが特徴であるが、地域スポーツ振興に関しては、総合型地域スポーツクラブの理念に準じたクラブは限定的であり、地域スポーツ推進の旗頭となりうるプロスポーツ球団も存在していない。

このような状況の中で本学は、2007年に経済学部経済学科の中に2年次から選択できるスポーツマネジメントコースを設置しそれらに関連する科目が開講された。また2017年度には「スポーツマネジメント論」が開講され、広島県のJリーグチームであるサンフレッチェ広島と連携し教育提携講座を2019年度まで実施した。2021年度からはより地域に軸足を置く形で、“福山市スポーツ協会”と、福山市をホームに活動しJリーグ参入を目指してい

る“福山シティFC”そしてトレイルランなどの山岳レースやまちを舞台にしたロゲイニングなどを事業化する“一般社団法人 ITADAKI”の3団体と連携し実施した。

以上を勘案して本研究の目的は、本学スポーツマネジメントコースの中核科目である、「スポーツマネジメント論」の授業フレーム作成過程から、その内容と実施に至るまでを概観する。そして受講生提出レポートの定性分析による授業効果を把握し、本学におけるスポーツマネジメント教育のあり方を考察し次年度に向けた授業の質の向上を目的とする。

2, 研究方法

本研究の目的を遂行するために以下の2点について調査を行う。

2.1, 「スポーツマネジメント論」の授業フレーム作成過程とその概要について

本学経済学部経済学科スポーツマネジメントコースの科目である「スポーツマネジメント論（2021年4月22日～8月5日まで毎週木曜日1回80分×15回）」の授業フレームの作成過程から、その内容と実施についての詳細を明らかにする。これにより本学での来年度以降に実施する「スポーツマネジメント論」における授業フレームの基礎的資料となり、今後の改善点の軸を作る上で有益な参考資料になると考えられる。その為に授業開始前から重ねてきた授業担当教員間や授業に参画していただいた3団体との打ち合わせで作成した会議録と、授業現場における授業担当教員2名による参与観察から、授業フレーム作成過程とその内容を明文化し提示する。

2.2, 受講生提出レポートの定性分析について

「スポーツマネジメント論」の授業効果については、授業最終回に受講生75名（4年10名、3年25名、2年40名・男71名、女4名）に実施し、無記載であったレポートは削除し有効回答であった51名の提出レポートの内容について定性分析を実施した。提出レポートの内容は、5件法によるリッカート方式を採用し、授業満足度に関しては、1満足2ほぼ満足3どちらとも言えない4やや不満5不満と、スポーツマネジメントに関する知識の深まりに関しては、1大いに深まっている2やや深まっている3どちらとも言えない4あまり深まっていない5全く深まっていない、で得点化し、その得点に至った理由を文章で記載するよう設問した。それらの文章について、樋口（2004）が開発したテキスト型データの計量的分析ソフト「KH Coder」を使用し、頻出語・共起ネットワーク（言葉同士のつながり）について分析し、受講生がどういった授業内容に満足を示し、どのようなスポーツマネジメントに関する知識を獲得したのかを把握する。これらの結果から来年度に向けての授業フレーム作成への参考資料とすると共に、来年度以降実施予定である定量調査に向け

た使用尺度設定の仮説に対する根拠とし、「スポーツマネジメント論」における授業成果設定とその内容の質向上に寄与するものである。

3, 研究結果

3.1, 「スポーツマネジメント論」の変遷及び授業フレーム構築過程と概要

3.1.1, 「スポーツマネジメント論」 第1期

経済学部経済学科スポーツマネジメントコースの専門科目として2017年度より開講する。2017年度から2019年度の3年間はサンフレッチェ広島との提携講座としスポーツマネジメントやビジネスを実践されている外部講師による講義形式で開講していた。学生の多くはスポーツに関する仕事として「選手、指導者」「スポーツメーカー、ショップ」のイメージが強い。そこで本講義ではスポーツに関わる様々な視点を学生に提供することを目的にスポーツマネジメントに携わる多彩な講師陣を選定し講義を実施した。具体的にはプロチームの運営担当、広告代理店、スポンサーサイド、イベント・グッズ企画、競技団体、メディア・マスコミ等スポーツを支える側の実践例を中心にレクチャーを提供することができた。

3.1.2, 「スポーツマネジメント論」第2期授業フレーム構築過程

第1期を3年間継続し一定の成果は出たものの一方でいくつかの課題も見えてきた。そこで2020年度は一旦不開講としてリニューアルを検討。特に以下の2点については解決すべき課題と認識して議論を重ねた。

- 1、講演形式の講義であったため学生にとっては受け身の授業となった。
- 2、講義内容がグローバル、プロフェッショナルな話題が多かったため学生にとっては当事者意識を持ちにくかった。

そこで本講義を担当する教員を2名に増員し、よりきめ細やか指導ができる体制を整えるとともにスポーツマネジメントコースのコア科目として確立することを目指して検討を開始した。まずは以下の2点をリニューアルの方向性と定めた。

- 1、学生が主体的に学べるアクティブ・ラーニング形式を採用する。
- 2、当事者意識を持てるよう福山市についてのテーマを設定する。

この方針のもと2020年当初より本講義担当教員（吉田、中村）によって講義設計を開始する。まずは講義の枠組みを「スポーツを通じた福山市の活性化、課題解決」をテーマにディスカッションを重ね、最後にプレゼンテーションを行う形に決定した。さらにこの方針に沿って協力いただく外部団体を選定し、2021年度は公益財団法人福山市スポーツ協会、一

般社団法人 ITADAKI、福山シティフットボールクラブに外部講師として担当してもらうことになった。3団体に対しては2020年6月以降複数回協議を重ね具体的な講義内容について形を構築し。まさに大学側と協力団体とともに作り上げた講義と言える。

表1.2021年度スポーツマネジメント論実施概要

講義名	スポーツマネジメント論
実施曜日時限	木曜日3限 全15回
使用教室	大学会館クラフト
受講者数	75名
担当教員	吉田卓史 中村和裕（何れも経済学科スポーツマネジメントコース）
協力団体・担当者 (敬称略)	公益財団法人福山市スポーツ協会 : 小川佳晃 吉川誠 小川秀子 一般社団法人 ITADAKI : 豊饒光邦 福山シティフットボールクラブ : 岡本佳大
講義形式	オンライン (zoom使用) 10回 ハイブリッド2回 対面3回

3.1.3, 「2021年度スポーツマネジメント論」授業概要

本講義を受講する経済学科スポーツマネジメントコースの学生の多くは体育系の部活動に所属しているため、スポーツに関わる人材のイメージは「競技者」「指導者」等「する」スポーツの側面の認識が強い。一方で現代社会においてはビジネス、教育、地域貢献などスポーツを通じたマネジメントの側面を理解し実践できる人材が多く求められていると考える。そこで本年度は実際のマネジメントできる力の獲得を目指しアクティブ・ラーニング形式の講義を設計した。具体的には以下の通りである。

表2.スポーツマネジメント論講義内容一覧

授業回	Stage	形式	講義内容
1	1st	zoom	講義概要説明（吉田）、講師陣紹介、グループディスカッション
2	1st	zoom	レクチャー「福山市スポーツ協会について」（小川、吉川）、GD
3	1st	zoom	マネジメント事例紹介：（一社）ITADAKI 豊饒、福山シティFC岡本
4	1st	zoom	レクチャー「マネジメントとは」（吉田）、GD（各自の案）、発表
5	2nd	zoom	レクチャー「福山市の取り組み」（中村）、GD（各自の案）、発表
6	2nd	zoom	レクチャー「グループワーク」（吉田）、GD（各自の案）、発表
7	2nd	zoom	課題説明、グループディスカッション（中間発表に向けて）、発表
8	2nd	zoom	中間発表1（A-Gグループ）、講師によるフィードバック
9	2nd	zoom	中間発表2（H-Mグループ）、講師によるフィードバック
10	3rd	zoom	レクチャー「ビジョンの重要性」（中村）、GD、発表
11	3rd	hybrid	レクチャー「ビジョンをカタチに」（岡本）、GD、発表
12	3rd	hybrid	レクチャー「カタチを實踐に」（豊饒）、GD、発表
13	3rd	対面	レクチャー「実践のために」（吉川）、GD、課題説明
14	3rd	対面	最終発表会1
15	3rd	対面	最終発表会2

講義のメインテーマを「スポーツを通じた福山市の地域活性化」と制定。グループ毎に福山市の活性化につながる企画を立案し、最終発表会でプレゼンする講義形式とした。毎時間のフレームワークを1, 情報提供のためのレクチャー 2, グループでのディスカッション 3, 成果の発表及び講師からフィードバック 4, 課題提出とし、ZOOM を使用して遠隔にて実施した。グループディスカッションは ZOOM のブレイクアウトルーム機能を使用し、課題は本学の学習管理システムであるセレッソを通じて提出をした。

また講義を円滑に進行するために全 15 回の講義を第 1 回～第 4 回「遠隔とディスカッションに慣れる」1st ステージ、第 5 回から第 9 回「グループワークに慣れる」2nd ステージ、第 10 回から第 15 回「チームになり成果を出す」3rd ステージと 3 つのステージに分けて展開した。またグルーピングは学生の提出した福山市の課題解決案に基づいて行うことで、活性化案に対して課題意識を共有しやすくするとともに、これまで関わりの少ない学生とのコミュニケーション能力の向上およびチームビルディングの経験もできるような工夫をした。

3.2, 「授業満足度」と「スポーツマネジメントに関する知識の深まり」の定性的分析結果

授業満足度とスポーツマネジメントに関する知識の深まりについて、KH Coder の分析手法である、文章中に出現する語と語が共に共起する関係性を直感的に捉えることができる、共起ネットワーク分析からそれぞれの語の関連性について提示する。その前処理として、提

出レポート記述データ全体から分析対象の語を抽出し、文章全体でどのような語が多いのか、あるいは少ないのかを把握する頻出語の確認を行う。この前処理によって、抽出された語の数がカウントできるようになり、共起ネットワーク分析への準備が整う。

3.2.1, 抽出された語と頻出語の同定

3.2.1.1, 授業満足度

授業満足度に関する提出レポート記述データからは、67 の段落、87 の文が確認された。総抽出語数（分析対象ファイルに含まれているすべての語の延べ数）は 2462、異なり語数（何種類の語が含まれていたかを示す数）は 472、さらに助詞などの一般的な文章に使用される語が削除され、分析に使用する語として 992 であり、異なり語数は 342 が抽出されている。これらの頻出語の上位 50 語とその頻出語度を表 3 に記す。

表3.「授業満足度」についての記述における頻出50語

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	授業	36	18	ワーク	7	35	決まる	5
2	グループ	29	19	意見	7	36	参加	5
3	思う	26	20	内容	7	37	実際	5
4	考える	14	21	福山	7	38	少し	5
5	自分	14	22	聞く	7	39	面白い	5
6	人	13	23	コミュニケーション	6	40	話	5
7	発表	12	24	メンバー	6	41	話し合う	5
8	スポーツ	11	25	行う	6	42	ZOOM	4
9	企画	11	26	全員	6	43	イベント	4
10	案	9	27	他	6	44	違う	4
11	協力	9	28	話し合い	6	45	学生	4
12	満足	9	29	課題	5	46	考え	4
13	楽しい	8	30	活性	5	47	最後	4
14	経験	8	31	決まる	5	48	作る	4
15	対面	8	32	参加	5	49	出す	4
16	良い	8	33	実際	5	50	出来る	4
17	マネジメント	7	34	少し	5			

3.2.1.2, スポーツマネジメントに関する知識の深まり

スポーツマネジメントに関する知識の深まりに関する提出レポート記述からは、59 の段落、76 の文が確認された。総抽出語数（分析対象ファイルに含まれているすべての語の延べ数）は 2236、異なり語数（何種類の語が含まれていたかを示す数）は 428、さらに助詞などの一般的な文章に使用される語が削除され、分析に使用する語として 872 であり、異なり語数は 291 が抽出されている。これらの頻出語の上位 50 語とその頻出語度を表 4 に記す。

表4.「スポーツマネジメントに関する知識の深まり」についての記述における頻出50語

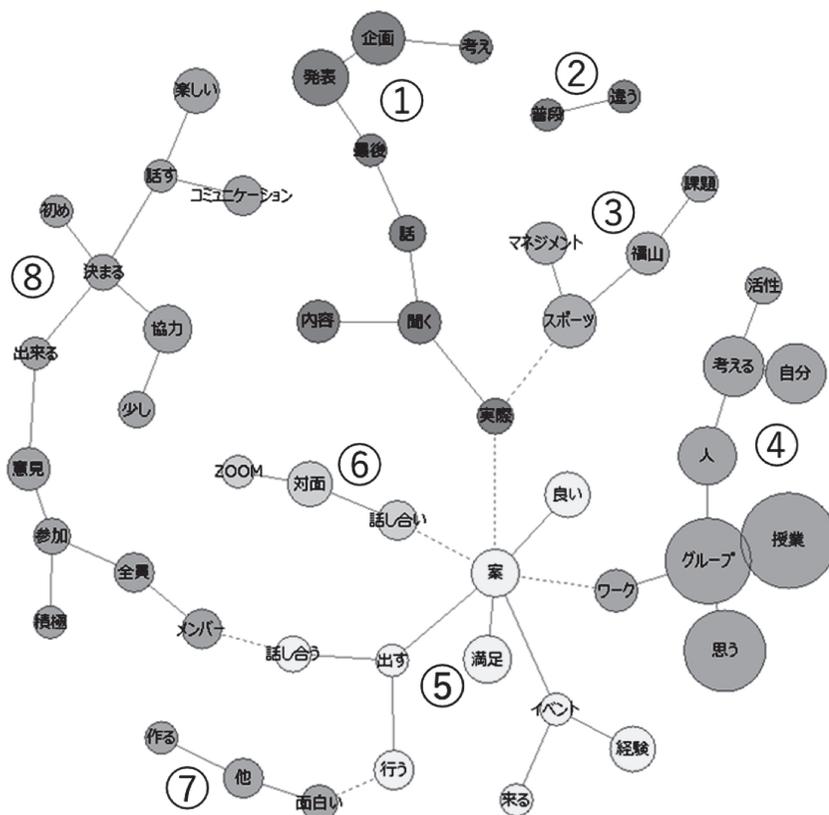
順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	スポーツ	31	18	活性	8	35	リーダー	4
2	自分	19	19	感じる	8	36	今	4
3	考える	18	20	発表	8	37	作る	4
4	思う	16	21	イベント	7	38	事業	4
5	人	16	22	班	7	39	先生	4
6	グループ	15	23	実際	6	40	大事	4
7	マネジメント	14	24	分かる	6	41	いろいろ	3
8	知識	14	25	聞ける	6	42	シティ	3
9	話	14	26	様々	6	43	ワーク	3
10	案	12	27	岡本	5	44	運営	3
11	福山	12	28	学ぶ	5	45	企画	3
12	聞く	12	29	現状	5	46	協会	3
13	深まる	11	30	行う	5	47	金	3
14	理解	11	31	視点	5	48	経験	3
15	意見	10	32	内容	5	49	考え	3
16	授業	10	33	面白い	5	50	行動	3
17	知る	9	34	たくさん	4			

3.2.2, 共起ネットワークの結果

共起ネットワーク分析を、授業満足度とスポーツマネジメントに関する知識の深まりの提出レポート記述それぞれに実施した。授業満足度においては8つのテーマに分類され、出現語数の取捨選択においては最小出現数を4に設定し、描画する共起関係の選定においては描画数を60に設定した。スポーツマネジメントに関する知識の深まりにおいては7つのテーマに分類され、出現語数の取捨選択においては最小出現数を3に設定し、描画する共起関係の選定においては描画数を60に設定した。下記の共起ネットワークを示す図1・図2では、円が大きいほど、出現回数が多いことを表し、語と語が線で結ばれているかどうか共起性や関連性の有無を表す。また線の太さが関連の強さとして表現されるが、円の位置や近さは共起性とは無関係である。語の色分けは、それぞれの語が共起ネットワークごとにグループ化されたものを表す。共起ネットワーク分析でそれぞれグループ化されたものにおいては、KH CoderのKWICコンコーダンス（原文の文脈を確認する機能）を使用し、それぞれの語の関連性を明確にし、テーマについて軸となる語に着目し、それらに関連される語に関しては統合的に記載を行い、類似性の高い内容については省略することとする。

3.2.2.1, 授業満足度

図1. 授業満足度の共起ネットワーク



授業満足度の共起ネットワーク分析により7つのテーマに分類された。

①では、企画・発表・考え・最後・話・聞く・内容・実際が抽出された。発表については、最初はまとまらないと思ったが最終発表にむけて協力関係が構築でき意見がまとまっていったこと、発表は緊張したがやり切ることができた充実感、発表に向けて班がまとまらなかったことなどがあげられた。企画については、普段とは違う企画するという立場、企画案の実効性の高さやインパクトの強さ、自班の企画案の質の低さ、他班の企画案からの刺激、前年度の企画案の確認希望などがあげられた。聞くについては、各講師の現場における実際に聞けたことなどがあげられた。

②では、普段・違うが抽出された。普段について、通常では関わることのない人や班内での役割という立場、そして普段考えることのない福山市の課題を考えることなどがあげられた。違うについては、普段にはない企画を立案する立場にあること、他の授業では毎回違う内容だが一貫性を持って取り組めたこと、授業内容が想定していたものと違っていたなどが

あげられた。

③では、スポーツ・マネジメント・福山・課題が抽出された。スポーツについては、福山市スポーツ協会との関わりから多くを学べたことや、スポーツマネジメントに関わる知識の修得、また福山シティ FC や ITADAKI のスポーツクラブの代表者からの講義、そして班内のマネジメントの難しさなどがあげられた。福山については、福山市の課題に取り組めたことなどがあげられた。

④では、グループ・授業・思う・ワーク・人・考える・自分・活性が抽出された。グループについては、グループ内での非協力者や年下の学生に対する対応の難しさという少数意見がある一方で、大多数は話し合いやグループワークでの関わりをポジティブに捉えている。授業については、通常のインプットだけの授業ではなく主体的に取り組めたこと、また対面実施についてのポジティブな意見などが見られた。考えるについては、自分自身で考えること、班で考えること、他人の考えを知れること、担当教員があまり介入せず学生だけで最後まで実施できたことなどがあげられた。人については、班内で実行する人が固定され、みんなできていないところがあげられた。

⑤では、案・満足・イベント・経緯・来る・良い・出す・行う・話し合うが抽出された。案については、考えた案に満足していることなどがあげられた。良いについては、良い経験・良い意見、良い案、何度も話し合っ作り上げる雰囲気の良い、実際の現場で働く人からの意見の良さ、もう少し良い案への後悔などがあげられた。満足については、授業内容に対する満足、まとめる力がついた実感、班内へのポジティブなコミュニケーションについてなどの一方、もう少し話し合いの時間があれば満足のいく企画案が出せたとの記述も確認された。来るについては、部活や寝坊が理由で授業や話し合いを休む、大学に来て大学生らしいことをしたなどがあげられた。

⑥では、話し合い・対面・ZOOM が抽出された。話し合いについては、企画案を考える上で話し合いが必要不可欠であることなどがあげられた。対面については、対面で講義を聞く方が良い、オンライン授業が長く対面での受講希望などがあげられた。ZOOM については、ZOOM でもグループワークが出来たこと、ZOOM でも対面授業のように取り組めたことなどがあげられた。

⑦では、面白い・他・作るが抽出された。面白い・他については、他人の考えを知れたこと、自分の班の企画について、他にない授業内容などがあげられた。作るについては、パワーポイント作成技能の向上や、友達との共同作業などがあげられた。

⑧では、決まる・話す・楽しい・コミュニケーション・出来る・意見・参加・全員・メン

①では、自分・グループ・発表・活性・知る・内容・地域・知れる・詳しい・面白い・他・考えるが抽出された。グループについては、グループ内やグループワークでのコミュニケーションによる仲の深まりや考えの深まり、グループリーダーへの感謝、他グループの発表からの感化などがあげられた。自分については、今後社会での新たなスポーツ需要を確認し自分もその業界で活躍したいと感じたこと、自分の班の企画案を考えるため他事例を多く参照したこと、自分自身の理解力不足などがあげられた。発表については、他班よりも優れた発表ができたことなどがあげられた。また活性・知るでは、リアルなお金の話やスポーツマネジメントに関連される地域活性化について、そして自分の知らなかった世界観などを知ることができたなどがあげられた。

②では、感じる・学ぶが抽出された。感じるについては、3団体の考え方や思いを感じられたことなどがあげられた。学ぶについては、スポーツマネジメントに関する知識を様々な視点で学べたこと、グループワークの大変さと面白さを学べたことなどがあげられた。

③では、人・難しい・金・協会・方々・色々・作るが抽出された。人については、3団体の人の話を聞いたこと、企画をしていくのには、人・物・金を考える、人を集める難しさ、どのような形で色々な人に情報提供をするかなどがあげられた。難しいでは、授業初回あたりでの知識のなさでの難しさ、スポーツマネジメントの実際の難しさなどがあげられた。作るについては、案を作るまたその発表資料を作るなどの経験ができたことにポジティブな見解がみられた。

④では、知識・班・深まる・マネジメント・スポーツ・考える・思う・意見・案が抽出された。スポーツ・マネジメントについては、スポーツの可能性を競技的なものだけでなくまちづくりなどにも感じられたこと、福山市の現状とスポーツ現状を理解できたこと、スポーツマネジメントのあり方や考え方そして思いの大切さなどがあげられた。知識については、講師や教員、そして同じ班内や他班の影響によるスポーツマネジメントや福山市の課題などの知識の獲得などがあげられた。意見については、みんなの意見を面と向かってぶつけ合ったこと、様々な意見や視点を得られたことなどがあげられた。案については、様々な案をかけ合わせることで、福山市の課題に対してスポーツが出来る案を考えることで、その影響を想定出来たことなどがあげられた。

⑤では、福山・話・シティ・聞く・岡本・現状・今・授業・理解が抽出された。福山については、福山シティ FC の岡本代表の話を聞いたこと、福山市の現状や課題についての理解と、それらに対してスポーツが出来ること考えたこと、そして様々な事例や3団体の話が聞いたことなどがあげられた。授業については、グループワーク中心の授業で普段関わりの

無い人との関わりを持てたこと、退屈しない授業だったこと、授業を通じた福山市のスポーツの現状理解などがあげられた。

⑥では、聞ける・運営が抽出された。聞けるについては他班の意見や講師の方々の話を聞いたことがあげられた。運営については、運営している人の裏話やイベント他大会を運営していくための実際を聞けたことなどがあげられた。

⑦では、大事・行動・分かる・想い・いろいろ・視点・行う・イベント・様々が抽出された。イベントについては、新たなイベント内容を一から知ることができたこと、スポーツイベントに限らずイベントを行う上での実行可能性の重要性、イベント行う上での顧客目線の客観性、イベントを行う際の様々な工夫などがあげられた。分かるについては、岡本さんの話を聞いて若いうちに行動しなければならないと分かったこと、提案の際に細部まで気にしなければならないことや情報発信の難しさが分かったことなどがあげられた。視点については、様々な視点を吸収し分析出来たことなどがあげられた。思いについては、思いがあって行動につながるなどがあげられた。

①の他は④の班と関連性を持ち、④の深まるは⑤の福山と関連性がみられた。

4, 考察

4.1, 「スポーツマネジメント論」の実際

最終発表会では、全 13 グループがグループワークを通じて立案した活性化案をプレゼンテーションすることができた。講義を通じてディスカッションやコミュニケーションスキルの獲得、プレゼンテーション能力の向上など一定の成果は示すことができたと考える。またマネジメントの概要を理解し実際に経験できたことは今後の学生生活においては重要である。さらに講義以外の時間にグループワークを行う習慣ができたことや、遠隔講義による外部講師の参加しやすさなど新たな利点も感じることもできた。また、外部協力団体はレクチャー、ファシリテーター、フィードバックと多くの役割を担い、学生と活発にコミュニケーションしていただけたことで講義が活性化したと考えている^{注3)}。

4.2, 授業満足度

授業満足度については、研究結果から実際の授業における参与観察を反映しその因果関係を考察する。

本授業での授業満足度を構成する要因として、発表という目標を通じてグループ内でのコミュニケーションや発表案の具体性や質について戸惑いながらも、発表という締め切り効果

が機能し、コミュニケーションや発表内容に一定の納得感を得ている。このことから授業を構成する要素の一つとして話し合いは必要不可欠なものと言える。また企画内容が実際に実行できるなど、自身の班の質の高さを強調するものもあれば、実現性の低さを認識するものもあったが、そういった班は他班の発表に強い影響を受けており各班の情報共有の大切さが伺えた。授業から得たものとしては、進行する力・協力し合う力・まとめる力が少しでも身についたという実感している。

各講師の現場における実際を聞いたことについては詳細までは把握ができないが、学ぶ事の多い時間となったようである。特に福山シティ FC 岡本代表の対面での講義から受けた影響について複数記述があり、講義の影響力の高さが確認された。

通常の大学生活では関わることのない学生との関わりや企画する立場、班内での役割、そして福山市の課題について普段身近にあるが触れることの少ないものへの関わりについてポジティブな記述がみられた。また福山市の活性化をスポーツで出来ることを考えるという授業で一貫されたテーマがインプット形式の授業と違うなどのポジティブな記述があった。他にもパワーポイントの作成技能など実務的な記述向上の実感が伺える。一方で授業内容が想定外だったとの記述に関しては、2017年度から2019年度の3年間実施したサンフレッチェ広島との提携講座を想定したものと考えられる。

福山市の課題に対してスポーツが出来ることを考える上で3団体の方々の講義から実際の現場での話などからスポーツマネジメントに関連される知識の獲得が確認された。また福山市スポーツ協会に関しては15回全ての授業に参加していただき、グループワークでは学生と一緒に考えアドバイスをしてくれたことにより、学生にとって多くの気づきをいただけたことが記述から伺えた。

授業テーマに対して学生が主体的に取り組めたと感じており、その要因として班のマネジメントやグループワークなどでのコミュニケーションだったと思われる。少数記述として班のマネジメントが上手くいかなかったり、考えたり行動する学生が固定化されるなどの記述もあった。これについては、班の人数を授業運営上5~6名にしており、この人数だと班の役割が与えられない学生が一定数みられた、来年度に向けては4名程度が妥当な人数ではないかと思われる。

本授業の開講年次は2年生からであるが、この世代は新型コロナウイルス感染症の影響により、多くの遠隔授業を体験してきた世代である。本授業においても前半はその影響により遠隔授業での実施を余儀なくされたが、授業順番からはハイブリッド授業と対面授業に切り替わっていき対面授業実施を望む学生が一定数みられた。しかしZOOMを使用した遠隔

授業をポジティブに捉える記述もあり一概に対面授業が良いとは言えないが、オンライン上よりは対面から受ける情報は多いと考えられ初期段階に一定回数対面の後、必要に応じて遠隔授業の実施が望ましいと考える。

4.3, スポーツマネジメントに関する知識の深まり

スポーツマネジメントに関する知識の深まりについても、研究結果から実際の授業における参与観察を反映しその因果関係を考察する。

本授業で獲得されたと思われる知識や能力について、班内での話し合いなどを円滑に進めるコミュニケーション能力の獲得や、それがうまく機能したことによる仲の深まりや企画案の充実、またそれぞれの班での役割の達成義務や他の役割に対する感謝、他班の発表などから受ける影響、そして実務的なこと例えば発表資料の作成などが確認された。話し合いにおいては、普段考えることの少ない福山市の課題をスポーツが出来ることについて、みんなの意見を面と向かってぶつけ合い様々な案を掛け合わせる大切さなどがあげられており、授業フレーム構築を考える上で改めて話し合いの場の大切さが確認できた。また上記についてはいずれもスポーツマネジメントには必要な要素であり実学として学べたことは意義深いものであったと思われる。

それら以外にも、3団体の講師による現場に沿った民間としてのリアルな収益の話や、公共としてのスポーツ振興のあり方について、そしてそれらの原動力である思いの大切さを感じられたことがあげられたが、これらについて官民それぞれの立場での地域スポーツ振興について学べたことは実学的なスポーツマネジメント知識の習得になったのではと推測される。また実際の企画案を考える上で、人・物・金や集客、情報発信などの難しさを挙げる記述が見られたが、逆をいうとそこまで考えられるようになったとも考えられる。何故なら授業初回あたりでの知識のなさを記述する学生もあり、一概に記述を同列に考えてはいけないがそういった実感も持ったのも事実である。

自班や自分自身が企画立案のため他事例を多く参照したことなどにより、スポーツマネジメントに関する知識の習得が確認された。またその影響からスポーツ産業に関する視野が広がりにより、職としてのスポーツへの期待を抱く記述も見られた。以上のことから本授業における授業効果については一定の効果があったことが確認された。

5, 結論

本研究では、「スポーツマネジメント論」の授業フレーム作成過程から、その内容と実施

に至るまでを概観し、定性分析による授業効果を把握し次年度に向けた授業の質の向上を目的とした。授業フレーム作成過程では、担当教員間や3団体との打ち合わせを通じて合意形成を計ることにより、こちらが3団体に望む授業内容を明確に出来たものと思われるが、今後も理論と実践の調整のためにも教員間や参画団体とは議論を重ねる必要がある。授業効果としても、スポーツマネジメントの根幹をなすマネジメント能力についての獲得が見受けられたが、より説得性を増すためにも来年度においては定量的にその効果を検証する必要がある。また今後の展開と課題については本講義で学んだ学生がその知識と経験を活かしリアルな現場でマネジメント能力を発揮できるようになることである。さらに講義内で立案したアイデアを実際に実施できることも目指していきたい。そのためには、企画の質を更に向上させること、受講学生の講義にたいするモチベーションの差を縮めること、そして学生と地域をつなぐ仕組みを作ることなどが必要であると考え。

6, 注釈

- 1)この見解については、「スポーツマネジメント教育の課題と展望」の冒頭にある「刊行にあたって」に記載がある。執筆者は早稲田大学スポーツナレッジ研究会世話人の武藤泰明（早稲田大学教授）である。
- 2)本学とは学校法人福山大学を指し広島県の最東部福山市に、1975年開学し現在は5学部14学科の総合大学である。
- 3) スポーツマネジメント論に参画した3団体の授業参加回数は、福山市スポーツ協会は全15回、ITADAKIと福山シティFCはそれぞれ5回であった。

7, 参考文献

内閣府（2016）,「日本再興戦略 2016—第4次産業革命に向けて—」

https://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/pdf/2016_zentaihombun.pdf

（2021年12月14日閲覧）

早稲田大学スポーツナレッジ研究会（2013）,『スポーツマネジメント教育の課題と展望』（有）創文企画.

張楓（2020）,『備後福山の社会経済史—地域がつくる産業・産業がつくる地域』日本経済評論社.

樋口耕一（2004）,「テキスト型データの計量的分析 —2つのアプローチの峻別と統合—（理論と方法）」『数理社会学会』第19巻1号,101-115.

Overview of sports management classes for university students and their effects

-From the qualitative analysis of the student submission report-

Kazuhiro Nakamura

Takashi Yoshida

In recent years, as the growing industrialization of sports has been positioned as a national policy, the ideal form of sports management education as a higher education institution responsible for the development of sports management human resources who will be responsible for it has been questioned. Since 2007, the Sports Management Course has been newly established as a course to be selected from the second year of the Faculty of Economics, Department of Economics. In this study, we focused on the subject "Sports Management Theory" provided by our sports management course, and conducted a qualitative survey focusing on the actual situation of the lesson and the degree of satisfaction of the lesson. As a result, some results such as acquisition of discussion and communication skills and improvement of presentation ability were shown. Regarding future developments and issues, the students who learned in this lecture will be able to utilize their knowledge and experience and demonstrate their management abilities in a real field. Furthermore, I think it is necessary to create a mechanism to connect students and the community so that the ideas planned in the lecture can be actually implemented.